

コンセール・スピリチュエルにおけるヴィエルの使用

——ノエルを奏でる牧歌的な楽器として——

木村 遥

本稿は、18世紀にフランスで開催されていた公開演奏会であるコンセール・スピリチュエルにおいて、ヴィエル・ア・ルウ（以下「ヴィエル」）がノエルの演奏に用いられていた事例に注目して論じるものである。ヴィエルは17世紀まで民俗楽器として扱われてきたが、18世紀初頭に楽器構造の改良が進められるとともに、次第に上流階層の人びとの関心を集めようになった。とりわけ1732年のクリスマスに開催されたコンセール・スピリチュエルの演奏会において、ミシェル・コレットが作曲したノエルがヴィエルとミュゼットによって演奏された事例は、ヴィエルが宮廷音楽に受容され始める端緒とみることができる。

そこで本稿では、コンセール・スピリチュエルのプログラムにおけるヴィエルの記載状況を精査し、この楽器がクリスマスにのみ、常にミュゼットとともに用いられたという特異な状況を明示する。18世紀初頭における器楽ジャンルとしてのノエルの成立には、キリスト降誕の場面に登場する羊飼いと結びつけられたバグパイプが、クリスマスにおける牧歌的性格の象徴として機能していた。数あるバグパイプのなかでも、ミュゼットは洗練された演奏姿勢ゆえに貴族にふさわしいと見なされ、演奏されていたのである。そして、これらの楽器の表象や構造に関する記述、および関連レパートリーの出版状況を検討することで、ヴィエルはミュゼットと同様に、宮廷音楽にふさわしい楽器として受容されつつあったことが明らかとなる。

このことは、1732年のコンセール・スピリチュエルにおけるクリスマス演奏会が、ヴィエルの社会的かつ音楽的地位の重要な転機であったことを示している。かつて農民や物乞いに結びつけられていたこの楽器は、こうした演奏会を契機に、上流階層が聴くもの、あるいは演奏するものとして受け入れられるようになっていったのである。